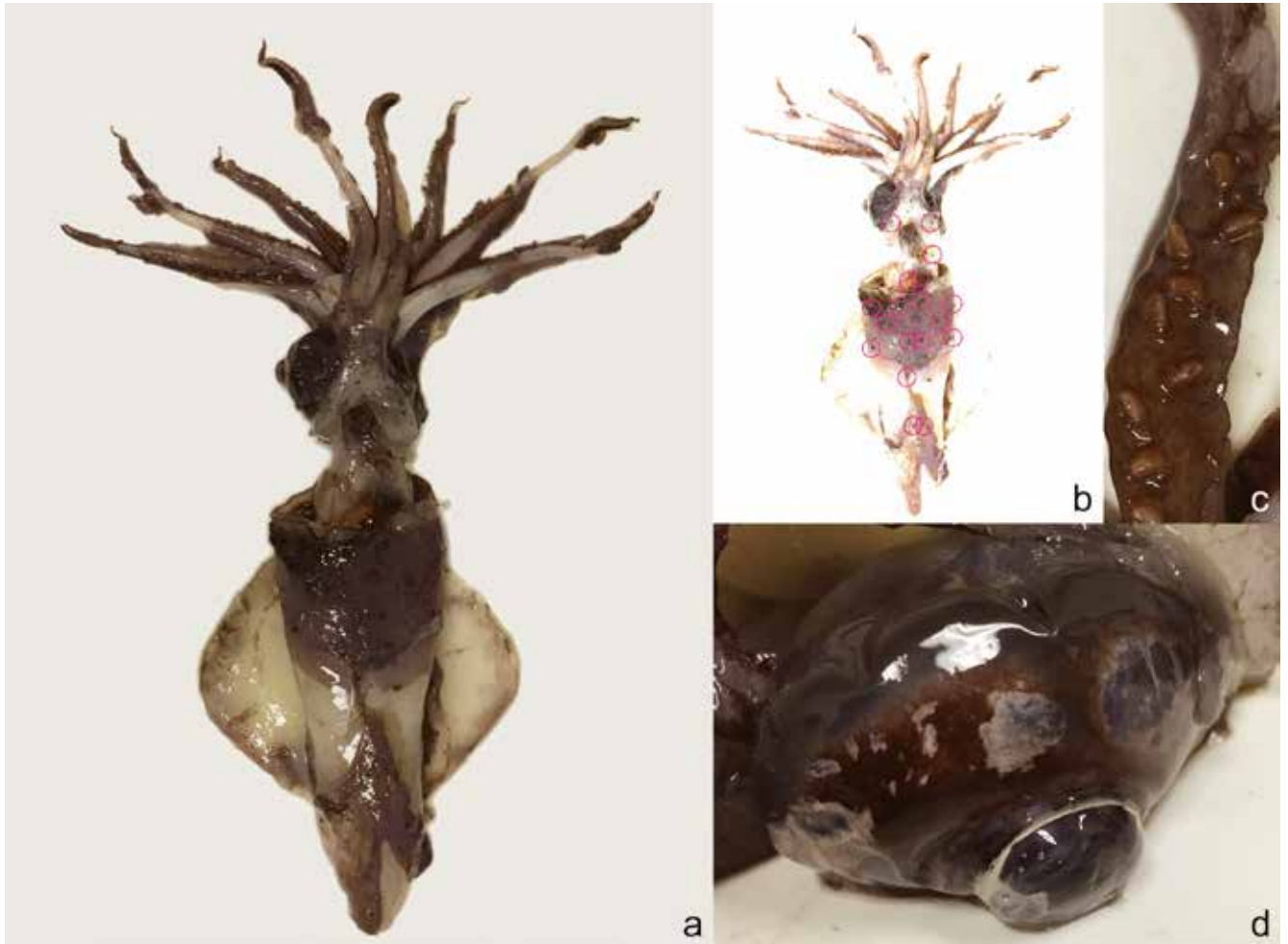


自然科学のとびら

Newsletter of the Kanagawa Prefectural Museum of Natural History

Vol. 21, No. 3 神奈川県立生命の星・地球博物館 Dec., 2015



ダイオウホタルイカモドキ

Ancistrocheirus lesueurii (d'Orbigny, 1842) KPM-NGL000124.

2015 年 7 月 24 日小田原市米神沖（相模湾）産。

小田原市漁業協同組合・米神漁場採集
佐藤武宏 撮影

a: ダイオウホタルイカモドキ（鮮時）；b: 発光器の配置（発光器を見やすくするためコントラストを上げる画像処理をおこなった）；c: 膜に包まれた鉤爪が 2 列互い違いに並ぶ様子；d: 直径 4 cm に達する大きな眼。

さとうたけひろ
佐藤武宏（学芸員）

水産技術センター相模湾試験場から、小田原市米神沖の定置網に迷い込んだ妙なイカが持ち込まれたという連絡を受けました。2 本の触腕は既に切れて失われていました。

ホルマリンで固定し、エタノールで保存したところ、イカは外套背長が 26 cm から 20 cm にまで収縮してしまいました。しかし、このことにより、外套膜腹面の発光器がくっきり浮き出てきました。この発光器が左右対称に 20 個ほど配列すること、体が寒天質でぶよぶよしていること、鰭が大きく菱形をしていること、眼が大きいこと、太い腕に鉤爪が 2 列互い違いに並ぶことなどの特徴からダイオウホタルイカモドキ科のダイオウホタルイカモドキと同定することができました。

食卓でおなじみのホタルイカはホタルイカモドキ科に分類され、本種とは比較的近縁と考えられています。外套膜腹面に多数の細かい発光器が密に分布し繊細なイルミネーションのように輝くホタルイカに比べると、本種の発光器はまるで武骨な電球のようです。さらに大きさもホタルイカの 6 倍ほどに達することから「ダイオウ」の名を戴いたのかもかもしれませんね。

スゲ属植物が作る「坊主たち」

かつやまてるお
勝山輝男（学芸部長）

はじめに

今年の冬の企画展は「日本のスゲ 勢ぞろい」です。スゲ属植物はきれいな花を咲かせる植物ではありません。何か眼をひくものはないかと思案した結果、ポスターやチラシには谷地坊主をデザインすることになりました。谷地坊主とは寒冷地の湿地でスゲの株が盛り上がったものが群生したもので、古い葉がゲゲゲの鬼太郎の髪の毛を思わせ、とてもユーモラスな形をしています。

谷地坊主のほかにも、高山や火山荒原でスゲ属植物がドーム状に盛り上がった株を作ることがあります。また、周氷河地域の微地形に凍結坊主と呼ばれるものがあり、似たような景観を作ります。これらをあわせてスゲ属植物が作る「坊主たち」を紹介します。

谷地坊主

谷地坊主といえば釧路湿原のものが有名です。かつては開墾の邪魔（かいこん じゃま）ものでしたが、いまでは天然記念物に指定されている所もあり、観光資源になっています。

谷地坊主はスゲ属植物が密な株をつくることと、凍結による土壌の隆起や雪解け水による根元の浸食作用が合わさってできるとされ、ドーム状ときには酒徳利を逆さにしたような盛り上がった株が作られます。

谷地坊主を作るスゲは根茎（こんけい）が短くて密

な株を作る種で、カブスゲ、ヒラギンスゲ、オオアゼスゲ、シュミットスゲ、ヌマクロボスゲが知られています。釧路湿原ではカブスゲが作る谷地坊主が多く、日光ではオオアゼスゲによるものが多いようです。

昨年の夏に乙女高原ファンクラブのUさんからメールをいただき、山梨県の乙女高原に谷地坊主があることを教えていただきました。乙女高原ファンクラブは山梨県の乙女高原の保全活動や自然観察会を続けているグループです。これまで山梨県に谷地坊主（おどろ）があるとは思っていませんでした。

今回の企画展のポスターやチラシに用いた谷地坊主も乙女高原のもので、谷地坊主を作っているスゲの種類が知りたくて、花穂（かすい）の枯れたものを送っていただいたところ、タニガワスゲであることがわかり、2重に驚きました。これまでタニガワスゲによる谷地坊主は知られていませんでした。

谷地坊主は春の芽吹きの際が、前年の葉が枯れて髪の毛のように残り、新葉もそれほど茂っていないので見頃といえます。そこで、今年の5月の連休に乙女高原を訪ね、実際に谷地坊主を見てきました。

乙女高原の谷地坊主は高原のところどころにある湧水（かんよう）に涵養された小湿地に生じていました（図1）。湿地にはタニガワスゲのほか、オタルスゲ、アゼスゲ、ヤマアゼスゲ、オオカワズスゲなどが生えていま

すが、なぜか谷地坊主を作っているのはタニガワスゲ1種（図2）だけでした。

アゼスゲやヤマアゼスゲは根茎（そうせい）が横に這うため、株は必ずしも密に叢生しないので、谷地坊主が形成されることはないように思います。しかし、オタルスゲは根茎が短く、密に叢生するので谷地坊主になっても良さそうに思います。谷地坊主の形成にはタニガワスゲの根茎の性質が関係ありそうです。

裸地坊主

図3は熊本県阿蘇山の火口周辺のものです。火山荒原にコイワカンスゲがドーム状に盛り上がりて生育したものが群生しています。湿地にできる谷地坊主とは明らかに異なるので、思わず裸地坊主と名づけてしまいました。用語としては定着したものではありませんが、ここでは裸地坊主と呼ぶことにします。

標高1000mを超える火山荒原の気象条件は厳しく、裸地部分では冬季の凍結融解による礫（れき）の粉碎や土壌の移動があり、風や雨水による浸食も加わって植物が簡単には侵入できません。コイワカンスゲに被われたところはその作用が弱められ、次第に盛り上がったドーム状の株になると解釈しました。この斜面のものは株の山頂側（火口の方）に、コイワカンスゲが枯れた部分があり、どの株も半分倒れたような格好になっていま



図1 山梨県乙女高原のタニガワスゲが作る谷地坊主（2015年5月2日）。



図2 新葉が展開したタニガワスゲの谷地坊主（2015年6月29日）。



↑ 図3 阿蘇山のコイワカンスゲによる裸地坊主 (2006年6月21日)。



← 図4 裸地坊主の山頂側は禿げている (2006年6月21日)。

した (図4)。

高く盛り上がると、風上側は強い風を受けようになり、スゲが枯れてしまうのでしょうか、よく見ると土の間に枯れた根茎が見られます。あるいは、火口方面からの火山ガスの影響があるのかもしれません。

tussock

谷地坊主を英語では tussock といいま



図5 タイセツイワスゲの tussock (大雪山 2002年8月14日)。

す。ただし、これはスゲ属植物などが作るドーム状に密に叢生した株を総称したもので、湿地にできる谷地坊主のみを指したものではありません。乾いたところに生えるイワスゲやヒメスゲなどが密に叢生して盛り上がった株も tussock といいます。

図5は大雪山で撮影したタイセツイワスゲですが、球状の見事な tussock といいます。このように単独または数個が並んだ程度のものはよく見かけますが、阿蘇の裸地坊主のように群生したものは見たことがありません。何か別の原因がありそうです。

凍結坊主 (十勝坊主)

構造土は凍結融解を繰り返すうちに幾

何学的な模様ができた土壤で、周氷河地域に生じる微地形の一つです。図6は大雪山白雲岳で見た凍結坊主 (frost hummock, earth hummock) です。最近ではアースハンモックとカタカナ書きされることが多いようです。直径50～150cmに円く盛り上がった構造土の一つで、キンスゲやヌイオスゲなどのスゲ属植物に被われ、所々にイワギキョウが生えていました。凍結融解を繰り返すうちに土壤や礫が移動し、その表面をスゲ属植物などが被うと、その部分が盛り上がり、凍結坊主が生じると説明されています。

谷地坊主の盛り上がった部分はスゲ属植物の根茎や根とその遺体が大部分ですが、凍結坊主の内部は細かい粒子の土の塊です。

凍結坊主の多くは大雪山や日本アルプスなどの森林限界以上に分布しますが、北海道の十勝地方には低標高地にも見られ、十勝坊主の名で親しまれているそうです。十勝坊主はまだ見たことがありませんが、機会があれば一度見に行きたいと思っています。

話はもどりますが、阿蘇山の裸地坊主のハゲた部分 (図4) を見ると、内部は土の塊のように見えます。森林限界を超えなくても、火山荒原などでは構造土が生じるとされます。阿蘇山の裸地坊主は単なる tussock ではなく、コイワカンスゲのみに被われた凍結坊主の一つと考えられます。



図6 大雪山白雲岳の凍結坊主 (2008年8月6日)。

ミニ企画展「いきもの探偵」を終えて

ふじたかずひろ
藤田和宏 (IP-egg)

はじめに

東京都及び神奈川県内で環境教育に関心がある者で「IP-egg」という有志のサークルをつくり、勉強会などを行っています。IP-eggとは、自然観察会などを行う“インタープリター”の“たまご”という意味です。今回はその活動の一環として、生命の星・地球博物館のミニ企画展コーナーにおいて、「いきもの探偵」(図1)を開催(2014.03.08-04.06)したので報告します。

ハンズオンとは

「ハンズオン」という展示手法は、しばしば「体験型展示」や「参加型展示」などとも呼ばれます。参加者が手を触れたり体を動かしたりし、その動作や作業を通して展示が伝えたいメッセージの本質への理解を深めるものです。20世紀に入ってからドイツやフランスの工業や科学系の博物館で導入しはじめ、その後、こども博物館で積極的に活用されるようになりました(ティム・コールトン, 2000. ハンズ・オンとこれからの博物館. 東海大学出版会)。日本でも科学技術系の博物館では以前から取り入れられていますが、近年では自然系の博物館やビジターセンターでも取り入れられています。1996年にオープンした滋賀県立琵琶湖博物館ではハンズオン展示を積極的に取り入れ話題を呼びました。県内でも、県立ビジターセンターでは、職員が手作りのハンズオン展示を多く設置しています。



図1 「いきもの探偵」展示全景。

私たちの取り組み

本展示では、①サークルメンバーの展示制作技術の向上と、②生き物への関心が低い方々に身近な生き物の面白さを気づかせるきっかけ作りを目的としました。ハンズオン展示を用いることで専門性の高い博物館でも、来館者がより生き物に

親しみと関心を持てるよう心がけました。以下のように対象などを設定しました。

対象：小学生と保護者

ねらい：子どもの好奇心を高め、新しい「発見」を生むように、来館者自身が探偵になって生き物たちの生態に関する謎を解き明かす

扱った生き物：スズメ、ヤモリ、カツオブシムシ、モグラ(市街地(特に横浜市内の郊外)を想定し、日常の中で出会うことの多い種類を選んだ)

ハンズオン展示の仕掛け

それぞれの生き物を次のように展示しました。種名の隣の括弧書きは展示につけたタイトル名です。

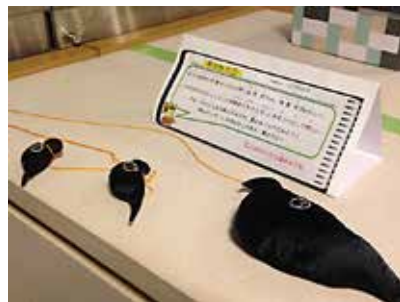


図2 鳥のぬいぐるみ。どれがスズメかわかるか？

スズメ「おうち のっとり事件」(図2)

ツバメの巣を乗っ取った犯人を探します。ヒントになるようスズメの生態に関するパネルを掲示し、スズメ、ハト、キクイタダキの実際の大きさと重さを再現したぬいぐるみを置き、正解のぬいぐるみ(スズメ)を当てます。ツバメの巣を利用することもあるなど、スズメの意外な生態を紹介しました。

ヤモリ「なぞの昆虫バラバラ事件」

虫を食べた犯人探しです。「窓ガラスに張りつく」「目が大きい」「鳴き声がきこえる」などヤモリの態に関するヒントが書かれたパネルを掲示し、ヤモリの模型や資料によりガラスにくっつくことのできる手の構造など、ヤモリのおもしろい生態が分かるような展示になりました。

カツオブシムシ

「密室!? 洋服かじり虫事件」(図3)

虫食いの穴が開いたTシャツに「この穴を開けた犯人を見つけよう」と掲示し、タンスの中からカツオブシムシのカードを



図3 タンスの中からカツオブシムシを探し出そう。



図4 モグラはどれかな？よく見て、触ってみよう。

見つけ出します。正解のカードのほかにカマキリやトンボなど身近な昆虫のカードも混ぜ込み、身近な昆虫の種類やその食性、変態することなどの多様性に触れられるように工夫しました。

モグラ「お庭 穴ボコボコ事件」(図4, 5)

モグラ塚の写真を掲示し、モグラ、アカネズミ、ヒミズの剥製を触り、「大きな前あしがある」「毛並みがやわらかい」などのヒントのパネルを手がかりに、庭を荒らした犯人を捜すクイズにしました。同時に本物の坑道から模ったレプリカを展示することで普段見られないモグラのくらしを実感できるようにしました。

展示全体の配慮と工夫

今回の展示場所は図書室から渡り廊下(橋)にいく通過点にあるため、いかに来館者の足をとめるか、また、ひと目で子ども向けであることがわかるように工夫しました。具体的には、色模造紙をつかって明るくカラフルにしたり、探偵をイメージしたキャラクターをつくり、各パネルに登場させたりしました。

一方で、普段は無人のスペースであるため、安全性と破損防止への配慮が求められました。ハンズオンの土台は倒れにくくしっかりとしたものをも博物館からお借



図5 モグラの坑道。知られざる地面の下の世界を見てみよう。

りし、モグラ坑道のレプリカでは土台の角にクッションを張り付けました。ぬいぐるみなどは、紐で土台と結びつけました。

モグラやネズミ類の剥製では、壊されない工夫と、毛並みを触ってほしいというこちらの目的とどこで折り合いをつけるかが課題になり、結局蓋のない透明ケース内に剥製を括り止め、透明ケースも土台に貼り付けることにしました。

当初は色鉛筆をつかった色塗りコーナーも検討しましたが、色鉛筆の紛失と落書き防止のため断念しました。

利用者の反応

本展示ではアンケートを実施しませんが、IP-eggのメンバーが利用者の様子を観察しました。

観察を行ったのは4月6日の15:30頃から16:00頃まで。この日は春休み最後の土日であり博物館全体は多くの来館者で賑わっていました。特に、小学生程度と思われる家族連れが半数以上を占めているようでした(図6)。

観察した来館者は3組でその内訳は、①男の子1名(小学3～6年生程度)②家族連れ(母、小学5～6年生程度の姉と小学2～3年生の妹)③女の子2人組み(小学3～4年生程度)でした。このほか、大人のグループ数組が通過しましたが、通り過ぎただけで展示は見ませんでした。

各来館者の様子は、①は非常に熱心にハンズオン展示に取り組み、特にモグラの剥製に興味があった様子で10分ほど剥製に触ったり坑道を観察したりしていました。②は、まずは母親が展示に気づき、娘たちにやってみよう誘いかけてました。母親が解説文を読み娘さん2人がハンズオンに取組んでいきました。③

は、男の子ほど時間はかけていませんでしたが、熱心にモグラの剥製をなでていきました。

展示は入り口と出口を設定し、端の展示から順番に進んで行くように導線を設けていましたが、どの来館者も目についた展示から取りかかり、その周りの展示に移るといった遊び方をしていました。

また、後日博物館職員さんから伺ったお話では、展示で遊んだ子どもが図書室に調べ物にきたそうです。



図6 展示にとりくむ親子の様子。

ハンズオン展示の効果

子どもの興味を引くという点においては、大きく効果を上げられたように感じます。ガラスケースを飛び出して、さも「触ってごらん」と展示物が置いてある様子やカラフルな色使いが子どもの目を引いたようです。また、来館者の観察で特に印象強かったことは親が子どもに、やってみようとしたことでした。子ども向けであることが、親の関心を引くことになったようです。

制作者の意図としては、「身近な動物への関心を高めること」でしたが、それがどの程度達成できたか、定量的な判断はできませんでした。

しかし、写真や文章で書いた解説パネルはほとんど読まれることなく、一方で工作物は熱心に遊んでもらえたことから、実際に触る、探すといった動作をとおして参加者自身が「考える時間」を与えることができたと思います。解説パネルで補おうとした知識や探偵ごっこというシチュエーションの説明は伝わりにくかったかもしれませんが、これもハンズオン展示の“仕掛けのおもしろさ”の効果だと感じました。

頑丈さについて

今回の展示で最大の不安要因であった「スタッフが常駐しない」という状況の中、壊れた展示もありました。鳥のぬいぐるみが破かれていたこと、虫のカードが

紛失したことや糊付けした部分が剥がれたことなどです。壊れてしまつては、伝えたいメッセージも伝わらず、安全上も問題であるため、頑丈な展示にすることの大切さを改めて実感しました。

人による解説との違い

私たちメンバーの何人かは、普段から人前で解説することを仕事にしています。相手が目の前にいる際には、参加者の反応や興味の程度などがつぶさにうかがえるので、途中で話のレベルを下げたり、考える時間を調整したりすることができず、どこに興味をもつか、どんな学びを得るかが、参加者自身に委ねられる割合が多くなります。

前出のコールトン(2000)によれば、展示の効果は物理的な環境のほかに、利用者の既存知識、博物館に対する期待、一緒に館に来た人の影響があり、展示デザインを行う際は、どんな人がどんな利用方法をするかを明確に想定しておくことと、同じく明確な目標設定が必要であると言われています。このことから、メッセージの伝わり方が、特に参加者の遊び方に委ねられるハンズオンという展示では、よりねらいをシンプルに設定しておく必要性を強く感じました。

博物館と市民団体のかかわりについて

本展示の内容を環境教育に関する全国フォーラムである清里ミーティング2014と環境教育ミーティング2014にて発表したところ、他の博物館から、巡回展示はできないかという質問をいただきました。質問の背景には博物館での人手不足があり、巡回できるパッケージ展示にしてはどうかと提案も併せて頂きました。博物館の活性化と市民団体の活動発表の場という視点から、今後は様々な団体と連携した展示室の更新も考えられるのではないかと感じました。

謝辞

本展示を行うにあたり、大島光春・広谷浩子両学芸員、破損した展示物を修復してくださった友の会の皆様のご尽力に心より感謝申し上げます。

きのこの標本・学名よもやま話

おりはらたかみち
折原貴道 (学芸員)

当博物館では、常設展示されている菌類の標本・模型こそ少ないものの、収蔵庫内には標本番号が付けられているものだけでも約 3 万点の菌類標本（変形菌を含む）が現在収蔵されています。中には、タイプ標本とよばれる、生物の学名の基準となる学術的にとても重要な標本も含まれています。タイプ標本の扱いを含む、生物の学名に関するルールは、3 種類の国際命名規約により定められており、各生物により適用される命名規約が異なります。菌類の場合、『国際藻類・菌類・植物命名規約』が適用され、この規約の下でタイプ標本はさらにいくつかの区分に分類されています（以下、本命名規約を基に話を進めます）。

タイプ標本のもっとも基本的かつ重要な区分として「ホロタイプ（正基準標本）」があります。学名を論文などで公表する際に、一つの種または種内分類群（亜種など）の学名に対し唯一つの標本または図解をホロタイプに指定します。すなわち、一つの学名に二つ以上のホロタイプが存在することは決してありません。

しかし、命名規約による学名のルール整備が不完全であった古い時代に発表された学名の中には、もともとホロタイプが明示されていなかったり、紛失してしまっていたりする場合があります。このような場合、その学名が発表された資料（論文など）に示された標本や図解から、ホロタイプの代替物を指定することになります。このような標本（または図解）を「レクトタイプ」といいます。ここでは、菌類（きのこ）のレクトタイプの例をご紹介します。

筆者の専門はきのこ類の系統分類ですが、特に地下生菌とよばれる、地上に

あまり顔を出さない、柄や傘が退化したきのこ類に興味を持って研究しています。ジャガイモタケ *Heliogaster columellifer* (Kobayasi) Orihara & Iwase はそのような菌の一例で、その名の通りジャガイモのような色と形をしています（図 1）。このきのこは 1936 年に高名な菌類学者、小林義雄博士（1907～1993）により新種として発表されましたが、その際、ホロタイプに相当する標本は指定されませんでした。筆者が以前、本種の研究を手がけた際、新種発表の際に示された 4 つの標本のうち、1930 年に東京大学の小石川植物園で小林博士が採集された標本を再発見し、論文の中でこの標本をレクトタイプとして指定しました。ちょうど今年の 10 月に、小石川植物園で菌類を採集する機会に恵まれましたが、残念ながら 85 年ぶりの同地での本種の再発見とはなりませんでした。

図 2 は 1929 年に、ナメコが新種として論文で発表された際に用いられた原図です。ナメコを新種記載したのは、日本初の理学博士として著名な伊藤圭介の孫である植物学者、伊藤篤太郎（1865～1941）で、彼は本種に *Collybia nameko* という学名を与えました。2008 年、森林総合研究所の根田仁博士は *C. nameko* の新種発表論文で示された標本が散逸していることを指摘し、命名規約にしたがい、論文に用いられた本図そのものを *C. nameko* のレクトタイプに指定したのです。これは図解がレクトタイプとして指定された珍しい例です。本図は今関六也氏の菌類画コレクションのうちのひとつで、当博物館に所蔵されています。今年、当博物館にて開催された特別展『生き物を描く～サイエンスのための細密描画～』で一般公開もされました。

科学の世界で、1 種の生物に用いられる学名は一つです。しかし、様々な経緯で、1 種の生物に複数の異なる学名が付けられてしまうことがあります。これらは「シノニム（異名）」とよばれ、原則として先に発表された学名が優先的に採用されます。一方、シノニムとは逆に、一つの学



図 2 *Collybia nameko* T. Ito (ナメコ) の新種記載に用いられた図の原図。

名が、異なる種に付けられてしまうこともあります。このような学名を「ホモニム（同名）」と呼びます。ホモニムはシノニムと比べるとずっと数が少なく、問題となるケースはそれほど多くありません。幸か不幸か、筆者はホモニムの問題を手がけたことがあるので、最後にその例をご紹介します。

地下生菌の属である *Octaviania*（ホシミノタマタケ属）の分類を進めていた時、過去の文献中で *Octaviania nigrescens* という学名が、それぞれオーストラリアと北米から記載された異なる種に当てられていることが分かりました。調べてみると、北米の方の種は初め別の属に含まれる菌として記載され、その後の研究で所属する属が変わった結果、同じ学名の種が存在することになってしまったことが分かりました。そこで、筆者はアメリカの研究者と共同で、その北米産の種に対し、換わりの学名（置換名）*Octaviania zelleri* Orihara & M.E. Smith を論文で提案しました。このような仕事は大変地味で、専門家からも顧みられることは少ないですが、将来の科学の発展へのささやかな貢献として、小さな石を積み上げていくことを今後も続けてゆきたいと考えています。

参考文献

- Neda, H., 2008. Mycoscience 49: 88-91.
Orihara T., Sawada F., Ikeda S. et al. (8 authors), 2010. Mycologia 102: 108-121.
Orihara T., Smith M.E., Shimomura N., Iwase K., Maekawa N., 2012. Persoonia 28: 85-112.



図 1 ジャガイモタケ。下は断面。

サヴァチェが神奈川県で採集した植物標本

たなかのりひさ

田中徳久 (学芸員)

1853 年、ペリー艦隊が開国を迫って来航し、時代は明治維新へと向かいます。そのような時代の流れの中、日本産の植物は、ペリー艦隊の随員であったウィリ



図 1 パリの自然史博物館の植物標本庫の外観。



図 2 自然史博物館の植物標本庫の内部。



図 3 キュー植物園所蔵のケケオトギリの標本 (Savatier, No. 158, K000677169)。
図 4 に示した標本の重複標本。

アムスとモロー、ライト、スモールやロシアのマキシモヴィッチ (1860 年に来日) と助手の須川長之助^{すがわちやうのすけ}、フランスのサヴァチェ (Paul Amédée Ludovic Savatier; 1866 年に来日) により採集され、それぞれ本国の植物標本庫に残されています。これらの中で、特に神奈川県に所縁が深いのは、横須賀に設立された官営製鉄所の医官を務めたサヴァチェが採集した標本です。

サヴァチェは勤務の合間に横須賀や横浜、鎌倉などで植物を採集し、標本をパリにあるフランス国立自然史博物館に送るとともに、私設の標本庫にも収蔵しました (後にロンドンのキュー植物園に収蔵; 図 3)。また、1880 年には、当時、パリのドレイクの私設植物研究所にいたフランシエの元に送っていますが、この標本は、その後、自然史博物館に収められたため、パリの自然史博物館にはサヴァチェの標本がかなり重複して収蔵されています (大場秀章, 2003. シーボルトの 21 世紀, pp. 119-129; 図 4)。

サヴァチェが採集した植物標本を研究したフランシエは、サヴァチェと共著で『日本植物目録』(1873-1875, 1877-1879) を著しています。サヴァチェが採集した標本

は、この著作の中で新種記載された多くの植物のタイプ標本となっています。その中には、神奈川県内で採集された標本も多く見受けられ、これらの標本をタイプ標本とする植物は、200 分類群を超えます。

また、サヴァチェが採集した標本は、タイプ標本として、植物分類学的に重要であるだけでなく、江戸時代末期から明治時代初期の日本の植物分布の証拠ともなり、地域植物相の生物多様性の基礎資料としても重要です。具体的には、横須賀で採集されたノグサなどはその代表例で、タイプ標本 (Savatier, No. 1396, P00076944) とここで示した標本 (Savatier, No. 1399, P00076945; 図 5) の 2 点のみが神奈川県で採集された標本として知られています。この他、現在の神奈川県では絶滅し、標本が確認されていなかったチョウジソウの標本 (Savatier No. 836, P03521656) も見出されました。これらの標本は、今は失われた植物が分布していた証拠であるとともに、これらの植物が生育していた良好な自然環境が存在していたことを示唆しています。

なお、本稿で紹介した標本の一部は JSPS 科研費 23501234 の助成により調査したものです。



図 4 ケケオトギリの標本 (Savatier, No. 158, P) 部分。D・E に「HERBIER E. DRAKE」のラベルが貼られています。



図 5 ノグサの標本 (Savatier, No. 1399, P00076945)。基準標本以外に知られている神奈川県で採集された唯一の標本。

催し物のご案内

企画展『日本のスゲ勢ぞろい ―撮って 集めた 269種!―』 2015年12月19日(土)～2016年2月28日(日)

スゲ属植物は世界に2000種以上、日本からは269種が知られる大きな属です。きれいな花を咲かせることはありませんが、果実期の穂は渋い美しさがあります。日本産のスゲ属植物の多様な世界を標本や写真で紹介しします。
企画展観覧料:無料(常設展は有料)

平成27年度子ども自然科学作品展 2016年3月19日(土)～5月8日(日)

小田原市、南足柄市、足柄上郡、足柄下郡の小・中学生の皆さんによる、日頃からの研究の成果を展示します。
作品展観覧料:無料(常設展は有料)

子ども向けワークショップ よろずスタジオ

毎週第1日曜日は「折り紙ひろば」、それ以外の日曜日は、実験や観察、工作を通じて、自然科学を身近に感じることができる体験型イベントを開催しています。(13:00～15:00 当日受付)

第119回サロン・ド・小田原 「日本列島スゲの旅」

2016年1月30日(土) 17:30～18:30

場所:博物館講義室
情報提供:勝山 輝男(当館学芸部長)

ミュージズ・フェスタ2016

2016年3月12日(土)・13日(日)

ミュージズ・フェスタは博物館の開館記念日を祝うお祭りです。今年もワークショップなど参加型の催しが盛りだくさんです。子どもも大人も楽しめるイベントですので、どうぞ皆さままでお越しください。

●室内実習「魚をもっと知りたい人のための魚類学講座」[博物館]

日時/①1月23日(土)・24日(日)

②2月6日(土)・7日(日)

各9:10～16:00

対象/中学生～大人、教員 各回10人

申込締切/①1月5日(火) ②1月19日(火)

●野外観察「早春の地形地質観察会 ～川崎市街地をめぐる～」

[川崎市街地(川崎市)]

日時/3月6日(日) 10:00～15:00

対象/小学4年生～大人、教員 40人

申込締切/2月16日(火)

●「博物館ボランティア入門講座」 [博物館]

日時/2月7日(日)～21日(日)

全体講座 2月7日(日) 10:00～16:00

分野別実習 期間中の1～2日

募集分野/植物、植物デジタル資料、菌類、魚類、無脊椎動物(貝・カニ)、両生・爬虫類、古生物(貝化石等)、古生物文献、展示解説、博物館教育プログラムの10分野

定員/各分野2～10名

申込締切/1月19日(火)

催し物の詳細については
ホームページをご覧ください。
問合せ先 企画情報部 企画普及課

生命の星



ライブラリー通信

LOVE! キュッパ

ほりおり さ
堀尾璃紗(司書)

私は今、とある一冊の本に魅了されております。皆さんは『キュッパのはくぶつかん』(発行:福音館書店)という絵本をご存知でしょうか? この絵本は著者オーシル・カンスタ・ヨンセンの出身地ノルウェーを皮切りに、ドイツ、フランス、スウェーデン、韓国など世界的にも評価されており、2015年は東京都美術館で展覧会が開催されたほど、注目されているのです。

原タイトル「KUBBE」はノルウェー語で「丸太」という意味なのですが、日本人には発音が難しいので「キュッパ」というかわいらしい名前になった本書。イラストレーターの父親の影響を受け、幼少期より絵を描いていたというオーシルのイラストはかわいらしいだけでなく、松ぼっくりなどは細部まで描き込まれ、とてもリアル。著者紹介文を読みますと、ご趣味は木の根などの収集、模写とのこと。納得のディテールです。キュッパの趣味は色々な物を拾い集めること。集め過ぎて仕舞う場所を失い、困ったキュッパは博物館を開きます。ただ拾い集めるだけでは博物館を開くのは困難でしょうが、キュッパは違います。拾い集めたモノを並べると、まず名前を調べ、分類し、一つずつラベルを付け、箱にきちんとしまします。まるで学芸員のように収集、分類、管理を行い、聡明なキュッパの祖母の助言の元、宣伝、展示、解説、図録制作まで行方です。最終的に博物館はやめてしまうのですが、キュッパは立ち止まりません。さあ、次はどうしようかと、次から次へと新しいことを始めてしまうキュッパのポジティブな探求心に触発され、思わず自分も何か分類してみたくなること請け合いです。

遊び心もいっぱいのある本書、ぜひじっくり観察しながら読んでみて下さいね。

編集後記

バリの劇場やロシアの旅客機などでテロ事件が発生し、たくさんの方が亡くなりました。大変痛ましいことです。しかし欧米諸国の博物館では、それ以前から、入館者の荷物検査や身体検査を実施するところが多くあります。空港並みのX線検査をする館もあり、入館するのにとても時間がかかります。日本の博物館でも安全にかけると時間とお金が必要になるかもしれません。

自然科学のとびら

第21巻3号(通巻81号)

2015年12月15日発行

発行者 神奈川県立生命の星・地球博物館
館長 平田大二

〒250-0031 神奈川県小田原市入生田499

Tel: 0465-21-1515 Fax: 0465-23-8846

<http://nh.kanagawa-museum.jp/>

編集 大島光春

印刷 株式会社あしがら印刷

© 2015 by the Kanagawa Prefectural Museum of Natural History.

* 冊子体には再生紙を使用しています。